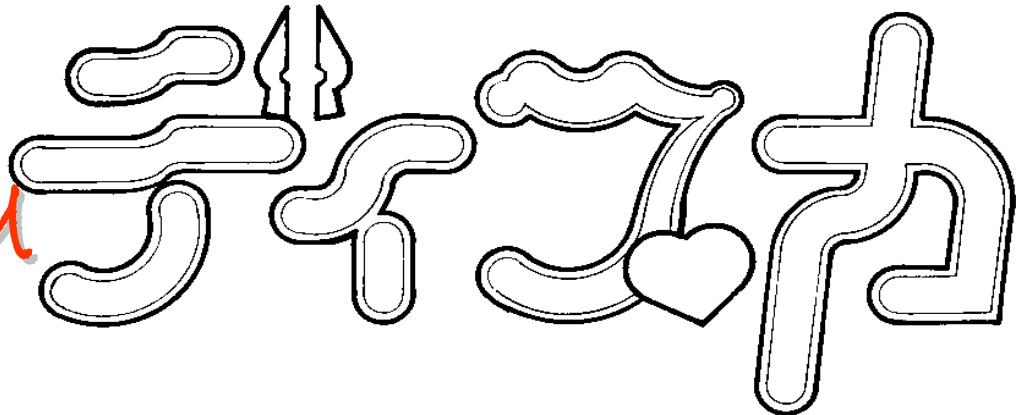


月刊
JMITU



長崎に投下された原子爆弾により亡くなった方々の約7割が、子供・女性・高齢者でした。この事実を永久に忘れてはならない。

1945
8.9 11:02'

「被爆50周年記念事業碑」

9月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2025年発行

No.489

セガ 休職関連規定の改定

9月12日セガ社人事部より、「休職関連規定の改定」についての説明がありました。10月1日より休職についての以下改定を行いたい。

改善内容

- 休職期間の上限を1年から1年6ヶ月にする。

業務外傷病（変更）

- # 保存有給の取得ルール変更

業務外傷病（変更）

- 改定の目的

 - ・十分な休養・療養期間を設定し、再発による再休職を防止する。
 - ・用途が限られ、等級による格差の大きい傷病有給制度は

その他会社が取得を認めた場合

- その他前各号に準ずると会社
が認めたもの 主治医意見書
等により必要と認めた期間

その他前各号に

- ・当該休暇期間が20日未満の場合
 - ・性同一障害に関する治療(変更)
 - ・診断書、それに準ずる書類
 - ・診断書、それに準ずる書類
 - ・診断書、それに準ずる書類

療を終えても再発や慢性化の可能性のある病気です。本当に通算して1年6ヶ月でいいものなのでしょうか?

- 療を終えても再発や慢性化の可能性のある病気です。本当に通算して1年6カ月でいいものなのでしょうか？

する旨の医師の診断
子の看護等（変更）

(団体長期障害所得補償保険)

- ・傷病休暇中の所得減額分をカバー標準月額の30%、1ヵ月後を過ぎ傷病手当金終

推測

仙洞田一彦

ここは、たすけあいの団体だ。困っている人がいると聞けば、そこに駆けつける。事務所に待機しているのは三、四人から五、六人。本来の手助けで出掛けている人は勿論あるが、本人の用事もあれば、高齢だから通院もあり、全員がそろうのは珍しい。

事務所は元自動車修理工場だつたらしい。板壁でトタン屋根。廃業で壊すところだったが、団体の事務所に貸してくれた。コンクリート床だつたが、床板も張つてくれた。今日は週末の金曜日、ニュース発行日だ。会員に配る定期発行のニュースで、加入を

呼びかけようとか、あっちの手助け、こっちの手助けの応援に駆けつけようという内容だ。

午後二時ごろ、ほぼ常連の四人がいた。ニュースはA3裏表印刷。

ソッセンさんの書いた記事はある。ソッセンは苗字ではない。ここにいる誰かがつけた渾名だ。とにかくパツパツパと「率先」して仕事するからだ。手助けで駆けつけるのも早い。年齢は七十代後半。行動を反映していて、頭はつやつやしていて光沢がいい。歩くのも早いし、気も早い。

私が行つた時、ソッセンさんはニュース原稿を書き終え、すでに調理に取り掛かっていた。週末はニュース作成後、「今週も、『苦労さん』の意

味も込めて一杯やる。そのつまりまみを作つてているのだ。

「ガンさん、ガンさん、ちょつと来て」

事務所の奥にある炊事場からソッセンさんの声がした。ガンさんというのは七十になつたかどうかの年齢で、今ここにいるメンバーの中では一番若い方だ。ガンさんと呼ばれるように、肩幅と言い、胴回りという、頑丈そうな体つきをしていた。その筋肉質を表すような半袖Tシャツを着ていた。ガンさんはパソコンに向かつて、誰かの原稿を入力しているようだつた。

「ガンさん」
また、さつきよりでかいソッセンさんの声がした。
私は勝手に推測した。おそらくソッセンさんは途中で、どこかに出かけるのだろう。無論、応援、手助けの用ではあるだろう。だから調理の続きを頼んだに違いない。どうして自分で最後までやらない

「はあい」
ソッセンさんのせつつくよ

うな声に、ガンさんはゆつくり返事をして、ゆっくり立ち上がり、奥の炊事場に行つた。

ソッセンさんがガンさんに何か言つてはいる。ガンさんは戻つてくると、またパソコンの前に座つた。沈黙のままであるし、表情も立つて行つた時と変わつていない。初めてここに来た人なら、「急げ、急げ、早くしろ」というようなソッセンさんの声に、悠揚迫らざるガンさんの応対ぶり、この会話のギャップに驚くかもしれない。

私は勝手に推測した。おそらくソッセンさんは途中で、どこかに出かけるのだろう。無論、応援、手助けの用ではあるだろう。だから調理の続きを頼んだに違いない。どうして自分で最後までやらない

んだろう。出掛けるなら調理しなければいいと、ガンさんは心の中でつぶやいているかもしれない。いや、私の心中がつぶやいた。出掛けるなら初めから調理しなければいい。ガンさんではなく私がそう思つた。

感受性も違うのだろうと思う。ジンさんはソッセンさんの原稿を読んでいる。手には赤のボールペンを持っている。ソッセンさんの原稿の推敲、校正をしているのだ。

うがないとジンさんは思つて
いるのかもしれない。いやジ
ンさんでなく、私がかつてに
推測した。調理する暇があつ
たら、原稿の推敲をした方が
いい。ジンさんはそう思つた
かもしけない。いや、ジンさ
んがそう思つたかもしれない
と私が思つた。

ショルダーバッグを斜にかけたソツセンさんはドアの向こうに、言葉と共に姿を消した。一時間ばかりでニュースは印刷も、封筒詰めも完了した。恒例のご苦労さん会だ。ジンさんは真っ先に冷蔵庫に向かつた。ソツセンさんが、毎週、差し入れてくれる酒の一升瓶を取りに行つたのだ。

大きいテーブルの、私の隣りに座つた——いや順番で正しく言うと、先にジンさんが座つていた、その隣に私が腰かけたのだ。

ジンさんが、またうなつた。
ジンさんは「ソッセンさんは、なぜこんな中途半端な記事しか書けないんだ」と思つてゐるに違ひない。赤ペンの入れようがないのだろう。間

ジンさんは、またうなつた
が、うなりつつ、ボールペン
で何やら書き込んでいる。
午後四時ごろになつた。ソ
ッセンさんは炊事場から事務
所の方へ急ぎ足で來た。

なり声を出した。ジンさんは
ガンさんより少し歳が上で、
ソツセンさんは下ではな
いかと思う。ジンさんは女性

ソツセンさんは炊事場にいるのだから、分からなかつたら聞けばいいのだが聞かない。

「行つてらつしやい」
みんなが答えた。誰かが「帰つてくるの」と聞くと「いや」とソッセンさんは否定した。

と私が推測した。
注いでもらおうと、私は空いたグラスをガンさんの前に差し出した。